

フィクション劇場 第十一話「募金」



「募金」
フィクション劇場（セレクト）
大太 大 第十一話

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太大（お
おた・だい）と申します。つたない作品
にご興味を持って頂き、ありがとうございます。
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑問に思っていることなどに対して、「もし、こういう設定や条件になったら、当事者たちはどう動くのか」を考えたオムニバスドラマです。フィルム・バイヤーさんではドラマ部門に全二十五話をまとめて公開しており、それと同様に完全著作権フリーですので、詳細はそちらをご覧ください。マスメディアに少々風が向いている「性根の曲がった社会派ドラマ」で、この第十一話はそこから、作者が是非読んで欲しい脚本をセレクトした話になります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第十一話「募金」

【登場人物】

宮下 義弘（みやした・よしひろ）（48）：

大日本テレビチャリティー番組「S・A・

G・I・」総合プロデューサー

山田 浩一（やまだ・こういち）（63）：大

日本テレビ取締役

石川 元基（いしかわ・もとき）（40）：

「S・A・G・I・」プロデューサー

真鍋 邦夫（まなべ・くにお）（44）：同右

藤村 直（ふじむら・ただし）（45）：同右

近藤 和美（こんどう・かずみ）（27）：同

アシスタントディレクター

本木 英智（きもと・ひでち）（53）：アニ

メ1 プロデューサー

武山 慶次（たけやま・けいじ）（50）：ア

ニメ2 プロデューサー

仁科 弘明（にしな・ひろあき）（37）：深

フィクション劇場 第十一話「募金」

夜アニメ プロデューサー

江ノ島 秀樹（えのしま・ひでき）（27）：

「S・A・G・I」の応援寄付サイト立ち上げ者

萩原：電話（声）

ネット民1

司会

「S・A・G・I」総合司会

メインパーソナリティ

宮下の息子

【あらすじ】

大日本テレビ毎年恒例のチャリティー番組が今年も開催される。取締役の山田浩一は総合プロデューサーに宮下義弘を指名、原点復帰と数値目標を示される。

宮下はプロジューサーの石川元基・真鍋邦夫・藤村直と動画サイトで、募金をスーパーチャットでも行なえる企画を模索する。

一方、番組に否定的な江ノ島秀樹は、悪意を持って、応援寄付サイトを立ち上げる。

番組が始まり、江ノ島の意図を理解した人々が寄付を開始。江ノ島を協力者と見た宮下は、番組への出演依頼をADに指示する。

しかし、番組ADの近藤和美は江ノ島の実動が、番組への抗議であると宮下に告げる。

番組終了後、宮下は、元司会者の萩原から番組に存在意義があれば形は問わないのではないかと助言される。そして宮下は一度立ち止まって考えたいと山田に申し出るが、山田からの返事に疑問を持ち、退社する。

○番組制作記者会見（昼）

フラッシュが焚かれる。

司会「今年も大日本テレビのチャリティ番組

「セーブ・アンド・ギフト・ウィズ・愛

2025（略称S・A・G・I・ 202

5）が開催されることになりました」

司会「放送時間は、全日帯、つまり午前6時
から夜の12時になります」

司会「それでは、総合司会とメインパーソナ
リティから抱負を頂きたいと思います」

総合司会とメインパーソナリティが

抱負を述べていく。

それを宮下が見ている。

（回想シーン始め）

○大日本テレビ 取締役室

山田浩一は椅子に座っている。

山田「宮下君、今年のS・A・G・I・は君
に任せたい」

宮下義弘「はい。光栄です」

山田「君に任せるのは、ウチのゴールデンで
人気番組を手がけている手腕を買ってのこ
とだ」

宮下「ありがとうございます」

山田「君も知っている通り、この番組は40
年以上続くウチの看板番組だ。チャリティ
番組で社会活動に貢献する意味合いもあ
る。だから多少単価は高いが、スポンサー
も積極的に広告を出してくれている」

宮下「はい。承知しています」

山田「：ただ、最近は番組の構成や考え方が
時代に合っていないのではないか、という
話も漏れ聞こえてくる。ここは原点回帰を
基本に、今の要素も取り入れて、うまく融
合させるように考えてくれ」

宮下「はい。分かりました」

山田「それと：」

山田は椅子から立ち上がり、外を見
る。

山田「両方とも15と20で頼む」

宮下「えっ…？ 数字が必要なのですか？」

山田「…この番組の『格』だ」

宮下「…」

山田「頼んだぞ」

宮下「…はい」

宮下M「原点回帰…か」

（回想シーン終わり）

○プロデューサー会議（番組編成の話…昼）

宮下・石川元基・真鍋邦夫・藤村直の

4人が会議室で打ち合っている。

宮下「石川、第一回目の番組プログラムは調べであるな」

石川「はい」

宮下「どんな感じだった？」

石川「2時間枠でアニメをやってますね、手

塚先生の。数字は良かったみたいです」

宮下「時間帯は？」

石川「お昼です」

宮下「アニメか…」

真鍋が身を乗り出す。

真鍋「宮下さん、アニメと言えばウチには大きなコンテンツが2つあります。後、子会社も」

宮下「ああ。今回はTシャツのデザインもしてもらったしな。オンエアは日曜日だから、昼の目玉になるかも知れないが」

宮下「いつものヤツの再放送は難しそうか？」

真鍋「分かりません。それなりに数字は取れるかと思いますが、新鮮味という点ではどうかと」

宮下「：まあ、そうだな」

真鍋「しかし、アニメは時間がかかりますんで、もしやるなら早めに話を通しておかない」と

宮下「分かった、すぐアポを取って説明しに行くことにする」

宮下「他には？」

石川「最後の方に、パレードをしていました

フィクション劇場 第十一話「募金」

ね。外です」

宮下「出演者でか？」

石川「主に司会者とパーソナリティのようです。直近のコーナー出演者も参加していたみたいですね」

宮下「そうか……。マラソンをどうするかって話はあるが、国技館で待っているより、こちらからどこかに出向いて、それからみんな募金箱を持って練り歩くっていうのもありかもな。近くで確保できそうな場所はあるか？」

真鍋「小規模でもステージくらいは作らないといけないでしょうから、代々木公園くらいしかないですね。ただ、国技館から10km以上、歩いて2時間はかかりますんで現実的ではありません。第一回は代々木がメイン会場だったようですが……」

石川「あとは、道路の使用許可もありますし、募金するために一般の方も付いてくるでしょうから、交通整理の人員確保のこと

を考えると……」

宮下「……難しそうだな。天候のこともあるしな」

宮下「ドラマは？」

石川「3回目からです」

宮下「今までは基本、ヒューマンドラマだったけど……。ドラマは数字に直結するしな」

石川「はい。それもフィナーレ直前ですの
で、それなりの盛り上げが必要かと思いま
す」

宮下「何かアイデアがあるヤツはいるか？」

藤村が手を挙げる。

藤村「宮下さん、アクションものとかはどう
でしょうか？」

宮下「アクション？ アクションと番組の趣
旨をどう結びつけるんだ？」

藤村「例えば、自閉症だが頭脳明晰な主人公
が事件を解決していくような。フランスの
ドラマでありましたよね？」

宮下「ああ、それは知ってる。他局でやって

たヤツだろ？」

藤村「はい。それにカーアクションとかを組み合わせ、って感じで」

宮下「カーアクションって言っても：、最近、そういうのは見たことないぞ？ 大丈夫なのか？」

藤村「この番組の大口スポンサーが昔、やってたと聞いていますので、ノウハウはあるんじゃないかと思っています」

宮下「そう言えば、そうだったな」

藤村「その時のキャスト再集結となれば、それなりの数字が取れるかと：」

宮下「なるほど。確かにM3、F3層あたりにはウケるかもな」

藤村「音楽はもちろん、あの方で」

宮下「あの人は、ウチの局とも関係が深いし、この番組とも関係が深い。アニメのテーマ曲は誰でも知ってるしな。いいと思う。ただ、名トランペッターが亡くなってしまったのは残念だが：。とりあえず、候

補の一つとしておこうか」

宮下「それじゃあ、他の項目も進めておいてくれ」

石川・真鍋・藤村「はい」

○同所 会議の続き（募金の話）

宮下「さて、次は募金だ。目標金額達成には、今までの募金のやり方にプラスアルファが必要だ。アイデアはあるか？」

石川が手を挙げる。

石川「宮下さん、より気軽に募金出来る方法を伸ばすのがいいと思います。前回もそれで伸びましたし」

宮下「具体的には？」

石川「すぐに目に見える形にするのはどうでしょうか？」

宮下「目に見える？」

石川「はい。今までの募金は、一度まとめてから、各団体に分配していました。ですが、それが不透明さを招いていたことも事

実です」

宮下「それで？」

石川「前回の募金では、キャッシュレス募金
が手軽ということでした。ですの
で、動画サイトのスーパーチャット、いわ
ゆるスパチャでそれをやればいいんじゃない
かと。実際にスパチャみただったとい
う話もあったみたいです」

宮下「…つまり、この番組のチャンネルを作
ってスパチャで募金を募る、ということ
か？」

石川「はい。スパチャならチャンネルを見て
いる人たちにすぐに分かりますので、募金
した感が出るんじゃないかと」

宮下は顎を手に当てる。

宮下「悪くはないな…。しかし、同時配信に
なるとスポンサーとの調整が難しくなりそ
うだが…」

石川「宮下さん、全部マラソンの中継とかは
どうでしょう？」

宮下「いいな！　それ。応援スパチャみたいな感じで。前回も目的がはっきりしていたからマラソンは好評だったし」

真鍋「私も面白いと思います」

藤村「私もいいアイデアだと思います。：だた、チャット欄にアンチが来て荒れませんか？　ただでさえ風当たりが強いのに：」

宮下「：そうだな。じゃあ、メンバー登録制にするか？」

真鍋「アンチが登録すれば、同じことになるかと思います」

宮下「：分かった。まずアンチ対策と、実際に出来るかどうかの2つを確かめることにしよう。配信と編集のチームに相談して見てください。この2つの目処がたった時点で考えよう」

石川「はい、分かりました」

宮下「よし、今日の打ち合わせはここまで」

○アニメスタジオ1（昼）

フィクション劇場 第十一話「募金」

本木英智「2時間スペシャル：ですか？」

宮下「はい。是非お願いしたいと：」

本木「そちらの趣旨に沿う話は、題材的に難しいですね。このシリーズのスペシャルドラマは、舞台が外国でスケールが大きい話が多いですし、そうでないとキャラが立ちません。情緒的なシーンもありますが、それは、他の迫力あるシーンとの対比があつてのことですから」

宮下「そうですね：」

本木「：ところで、製作費はどのくらいを見込んでいますか？」

宮下「一応、チャリティ番組ですので、格安でお願いしたいと思っていまして：」

本木「それはますます難しいです。そちらには大変な恩義を感じていますが、そういうことでしたら、お断りさせて下さい」

宮下「そこを何とか：」

本木「他の出演者のみなさんを悪くいうつもりはありませんが、タレントや芸能人の方

は、オファーを受けて何回か打ち合わせを
しての出演、なのでしょう？」

宮下「はい、そうです。ロケやドラマに出て
頂ける方はそれなりの拘束がかかりますが
……」

本木「でも、ウチが引き受けたとなれば、ア
ニメーターを始めとするスタッフが月単位
でかかりつきりになります。それで金払い
が悪いということになれば、ウチの存続に
関わりますので」

○アニメスタジオ2（昼）

宮下「……どうですか？」

武山慶次「これは……、難しいですね」

宮下「どの辺りが、ですか？」

武山「『社会的な弱者』をメインで描くって
ところですね。ウチのストーリーでいう
と、こういう人物は犯人側になってしまう
場合が多いんですよ」

宮下「どういう感じになるのですか？」

武山「こういう方が社会に対して怒りを持ってしまつて、復讐するために犯行に及ぶ、ってストーリーですね。最後に犯人の悔恨のシーンとかは入れられると思いますが、ほぼ悪役になつてしまいます」

宮下「…」

武山「あと、製作費もツライです。この尺ならもう映画です。宮下さんもお承知だと思いますが、ウチのコンテンツで新作映画を作れば、興収100億は下らない。それをTVでやるというのは、どうかと…。それらには十分貢献しているはずですよ」

○アニメスタジオ3（昼）

仁科弘明「えっ？ 深夜帯やってるウチが2時間アニメ？」

宮下「はい。そちらはウチの子会社なので、お願いしたいと…」

仁科「中身はどうするのですか？ オリジナルですか、それとも版權物ですか？」

宮下「そこまでは、まだ決めていますか？」

：

仁科「もし、版權物なら、こちらにも相應の

覚悟が必要になりますよ」

宮下「覚悟ですか？」

仁科「はい。版權物は原作の漫画なり小説なりに、既にファンがついていますから評価もシビアですし、当たり前ですが、作者の意向が無視できません。ですから、こちらで勝手にやっているとありません」

宮下「それは、承知していますが：」

仁科「この辺のことを先にきちんと契約とかで決めておかないとダメですね。何かあった時に、誰がどう責任を取るのかって話も含めて」

宮下「では、オリジナルではどうですか？」

仁科「こういう系の話はやったことがないの
で、何とも言えません。ただ、私たちが制作している深夜帯のアニメは万人向けではなくて尖っているものが多い。：という

か、尖ってることをやれるのが深夜帯の魅
力だと思っています。例え、スケジュール
がタイトで製作費が少なくても、です。正
直、ホントにキツいんですよ。落としてる
作品を見たことがあるでしょう？」

宮下「耳にしたことはありませんが……」

仁科「それに、まさか『謎の光』とか『謎の
BGM』とかがバンバン出てくるようなア
ニメを、真っ昼間にオンエア出来る訳ない
ですよ」

○プロデューサー会議 2回目（昼）

宮下「それじゃ、始めようか。この前の宿題
から」

石川「宮下さん、アニメの方はどうでし
た？」

宮下「お願いはしに行ったが、無理だな。や
はりアニメは人とお金と時間がかかる」

真鍋「子供たちが見てくれば、世帯の数字
もあがるんですけどね」

宮下「そうだが、こればかりは仕方ない」

宮下「真鍋くん、ドラマの方は？」

真鍋「はい。スポンサーからは、やはりカーアクションは、番組にそぐわないので協力できないとのことでした」

宮下「じゃあ、アクション抜きで、オリジナルのフランスのドラマのように、メインを二人にするような形ではダメそうなのか？」

真鍋「その話もしましたが、それですと他局の番組と似てしまうという懸念があると言われまして……」

宮下「……確かに向こうの方が有名だしな。例年通りの線で行くしかないか……」

宮下「ネットの方はどうだ？」

藤村「はい。配信は技術的には出来そうだったことでした。ただ、アンチ対策が大変そうですね」

宮下「どの辺りがだ？」

藤村「まだ、調べている最中ですが、チャッ

トのコメントの制御は出来ます。ブロックする単語の設定、メッセージの待機、管理者対応の三段構えになります」

宮下「じゃあ、その三段構えについて説明してもらえるか？」

藤村「はい。まずはブロックする単語の設定ですが、あらかじめ設定できますし、途中で変更も出来ます」

宮下「最初にブロックする単語は、どういうのを考えてる？」

藤村が躊躇する。

藤村「…言ってもいいのですか？」

宮下「かまわん」

藤村「えっと…、『偽善』とか『感動ポル

ノ』とか、『ギャラ』とか『やらせ』とか

『着服』とか…」

全員「…」

宮下「…全部、聞きたくないヤツだな…」

藤村「ブロックする単語ですから…」

宮下は息をつく。

宮下「まあ、分かった。次のメッセージ待機
っていうのは？」

藤村「送られたチャットの間隔に時間制限を
設けることです。一度に大量のチャットが
来た場合に有効です」

宮下「DDoS対策みたいなのか？」

藤村「イメージ的にはそうですね。ただ、あ
まり間隔を開けてしまうと、ライブ感が薄
れますから、その辺の匙加減は必要だと思
います」

宮下「最後のは？」

藤村「チャット全体の管理です。非常時にチ
ャットのオンオフができます」

宮下「そうすると、まず単語で弾いて、メッ
セージ間隔を空けて確認する時間を設けて
弾いて、どうしようもなくなったらチャッ
トを無効にする、という感じか？」

藤村「そうですね」

宮下「でも、最後の手段は取りたくないな」

藤村「その通りです。しかし、ブロック出来

なかったチャットの削除は基本的に手作業になります。ですので、それなりに人を当てないとパンクする可能性があります」

宮下「どのくらい必要になりそうなんだ？」

藤村「初めての試みですから、正直、読めません。具体的に言えば、同接、つまり同時に接続するアカウントの数の見積もりが難しいんです」

宮下「似たような前例とかはないのか？」

藤村「募金では知りませんが、ネットの人間は興味本位でアクセスするヤツが多いですから、今回やるとすれば、かなりの数になると思います。あまり良い例ではありませんが、ネットの気象情報番組のキャストさんの時なんかは、目で追えないくらいチャットが飛び交ってましたから。確か、同接が1万人以上はいたと思います。ただ1アカウントあたりのコメント数かなり多かったのではないかという話です」

宮下「：リスクがあるってことか？」

藤村「そうですね。同接の人数と、その人たちのコメント数によりますが……」

宮下「しかし、募金の間口を広げる意味では何とかやりたいところだな。いざとなればチャット欄を無効にすればいい訳だし」

藤村「それはそうなのですが……」

宮下「……よし、これについてはやる方向で行こう。他から何か言われたら私が出向くって言うてくれ」

石川・真鍋・藤村「はい」

○江ノ島秀樹の部屋（夜）

テレビで「S・A・G・I」の告知
を見ている。

江ノ島「……ったく、今年もやるのかよ、これ。オレも昔はピュアだったから、募金箱を持ったおねえさんに『少ないけど』って、小銭を入れてたもんだが……。これだけ、いろいろ言われているのになあ。さっさと終わればいいのに……」

江ノ島は、腕を頭の後に回して仰向けに寝る。

江ノ島「あゝあ、オレだって、社会の役に立ちたいとは思ってるんだけど…。募金の使い道とか募金額がホントかどうかはつきりしないんじゃないかな…。まあ、億とか寄付すりゃあ別なんだろうけど、オレ一人じゃあなあ…。」

江ノ島は、ハツとして起きる。

江ノ島「オレ一人…？ 一人じゃなきゃいいってことか？」

江ノ島が、ネットで探す（注…クラブアンのサイト）。

江ノ島「いや、普通のじゃダメだ。寄付するような形でないと…」

江ノ島が、また、ネットで探す（注…募金サイト）。

江ノ島「NPO法人とかじゃないとダメなのか？ 他にないのか？」

江ノ島が、また、ネットで探す（注…

寄付サイト。

江ノ島「…これなら行けそうだ！」

○国技館（番組スタート…朝）

宮下が国技館のスタッフルームで立って様子を见ている。

宮下「ネットの方は？」

石川「今のところ、特にトラブルはありません」

宮下「分かった、引き続き頼む」

石川「はい」

○ネット民（自宅…朝）

ネット民1はPCでマラソンの様子を

動画で見ている。

ネット民1「結局やるのかよ、マラソン。動画で走ってる場所が分かるけど、ワープとかしないだろうな？ 自分の首絞めそうだけど…」

配信チャット欄に「海岸のゴミを拾っ

て寄付しよう！（URL）のチャットが現れる。

ネット民1「なんだこりゃ？」

ネット民1はURLをクリック。「キフハウス」のHPに飛ぶ。

キフハウスのHPには「S・A・G・

I・ 応援企画。海岸のゴミを拾って寄付しよう！」の文字。

ネット民1「よく分からんな…、これ。ゴミを拾って寄付するって、ビンとかカンとか拾って廃品回収に出せてか？　そもそも、ここから海まで行くのにどれだけかかるとかってんだ？　…まったく、こういうゴミチャットこそ運営で消してくれりゃいいのに…」

ネット民1はネットでマラソン配信を見ている。

ネット民1は、ハッと気づく。

ネット民1「ちょっと待て…。海岸のゴミ…？　何か聞いたことあるぞ」

ネット民１は検索で「海岸 ゴミ」と入力する。

ネット民１は最後に「net」と入力する（この画面は見えていない）

ネット民１「これだ」

ネット民１「…」

ネット民１「…そうか、そういうことか！」

○国技館（午前中）

宮下が国技館のスタッフルームで、番組の様子を見ている。

石川「宮下さん、配信のチャット欄に、URL付きの『海岸のゴミを拾って寄付しよう！』ってコメントが増えています」

宮下「新手的嫌がらせか？」

石川「よく分かりません。悪意はないようですが…」

宮下「そのURLの先は？」

石川「どうやら寄付の専門サイトのように、個人が発起人になってるみたいです。一

応、この番組の応援サイトを謳っています
が…」

宮下のスマホに真鍋から電話。

宮下「宮下だが」

真鍋（声）「宮下さん？　ウチへの寄付サイトが立ち上がっています！」

宮下「ああ、それは石川から聞いたが…」

真鍋「すごい勢いで寄付が伸びています。番組が始まって3時間ほどですが、既に1億を突破しています」

宮下「なんだって!?　誰がやってるんだ？」

真鍋「分かりませんが、まだ伸び続けています。このままのペースだと4億円を超えるかも知れません！」

宮下「凄い味方が出てきたな…。よし！　その発起人と連絡を取ってくれ！　出来れば、フィナーレに出演してもらいたいと。リモートでもいい。それも無理ならコメントだけでも欲しいと伝えてくれ！」

真鍋「分かりました！」

宮下「これで、寄付の方は行けそうだ。後は、視聴率か！」

宮下「ステージの方、もっと盛り上げるように言ってくれ！」

○国技館（お昼くらい）

真鍋から宮下に電話。

宮下「はい、宮下だ」

真鍋「宮下さんですか？ 真鍋です。例のサイトの件、ADの近藤にお願いしましたが、大変です！ そちらに行って説明します！」

真鍋が電話を切る。

宮下「？」

真鍋とADの近藤和美が駆け込んでくる。

宮下「真鍋、何が大変なんだ？ 金額がそんなに伸びているのか？」

真鍋「違います！ 詳しくは近藤に説明してもらいます」

近藤「宮下さん、マズいです！　これはウチの番組に対する抗議です！」

宮下「抗議？　どういうことだ？」

近藤「この『海岸のゴミを拾って』のところ
です！」

宮下「ああ、それか。あまり気にしていなかったが、何か意味があるのか？」

近藤「大有りです！」

宮下「どういう意味なんだ？」

近藤「昔、他局の報道姿勢に抗議するために、その局のゴミ拾い企画をつぶそうと、ネットの連中が、先回りして海岸のゴミを全部拾ったことがあったんです。つまり、この言葉は、それと同じことをやるぞ、という意思表示なんです！」

宮下「…ということは？」

近藤「そうです！　この募金は善意じゃなん
です！」

宮下、顔面蒼白。

真鍋「宮下さん！　これだけの額になれば、

当然、使い道のチェックも求められ
ます！」

宮下「石川！ チャットから、これを弾けな
いのか？」

石川「で、できますが…。応援を謳っている
んですよ!？」

真鍋「宮下さん、この話、既にSNSで広が
っています！ だから、このゴミ拾いの意
味を知らない人間も、このサイトで寄付し
ているようです！」

近藤「それに、このサイトは、私たちに寄付
した募金の使い道の詳細を公開させると言
っています！ それも拍車をかけていま
す！」

宮下「…」

石川「宮下さん、どうしますか!? チャット
欄を無効にしますか!?」

宮下「…」

○大日本テレビ局内（番組翌日…昼）

番組の結果が出る。

視聴率は目標に届かなかったものの、

募金額は大幅増。

ネットでは「大勝利！」などのSNS

や動画が上がる。

落ち込んでいる宮下。

宮下に、元司会者の萩原から電話が入る。

宮下「はい、宮下です」

萩原（声）「僕だ」

宮下「あ、萩原さん！」

萩原（声）「今年も見てたよ。お疲れさま」

宮下「ありがとうございます」

萩原（声）「それで…」

宮下「何でしょうか？」

萩原（声）「僕が、もうこの番組にどうこう

いう立場じゃないのは分かってるんだけど

…、一度立ち止まって考えてみてはどうか

な、と思ってね」

宮下「…」

萩原（声）「この番組の歴史は長いが、最初は単発のスペシャル番組だった。それは、知ってるよね？」

宮下「はい、存じています」

萩原（声）「それが、今まで続いてきたのは、視聴者のみなさんに、この番組の意義を認めてもらってたからだと思ってる」

宮下「その通りだと思います」

萩原（声）「僕は、ネットとかよく知らないんだけど、募金で何かあったらしいね？」

宮下「：はい」

萩原（声）「『やらない善よりやる偽善』とはよく言ったものだけど、募金は受け取らないといけないだろう？」

宮下「その通りです」

萩原（声）「：僕は、何もやめようと言っているんじゃない。1回目の時は、それが時代に合っていたからそうだったんだと思う。冒険心みたいなものもあったしね」

宮下「はい」

萩原（声）「視聴者のみなさんに番組の意義

を認めてもらえるなら：、形にこだわる必

要はないんじゃないかな？」

宮下「：」

○同局内 取締役室（昼）

山田「宮下くん、お疲れだった。今回の募金

額は凄かったね」

宮下「はい」

山田「そこを見込んで、来年も君にやって欲

しいと思っているんだが：」

宮下「取締役、ありがたいお話しなのです

が、私は一度立ち止まって、この番組のこ

とを考えたいです。ですから、来年は番

組を一度休む形をご提案したいのですが

：」

山田は机を叩き、

山田「何を言っているんだ！ 一度休めば、

再開する時に苦労するのは分かっているだ

ろう！」

フィクション劇場 第十一話「募金」

宮下「はい：」

山田「それに、私がいる間にこの番組を止めるなんてとんでもない！ 先輩方に顔が立たん！ この番組に憧れて入社して来る新人たちもいるんだぞ！」

宮下「：それが：、この番組の意義なのですか：？」

○宮下自宅（翌年…昼）

自宅で宮下と息子がTVを見ている。

息子「この番組、父さんがやってたんだよ

ね？」

宮下「そうだ」

息子「これ、マラソン100kmって、凄い

よな」

宮下「：映ってる時はな」

E
N
D

（2025年6月15日 初出）

（2025年8月1日 単話アップ）